

〔物語〕 関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第四節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その二

新劇人に係わる多くの震災記録のなかで、とくに悲惨なのは小山内薫の師弟平沢計七の運命である。鉄鋼所の工員であった平沢は、大島・亀戸における労働組合活動家であるとともに、プロレタリア演劇の先駆たる（労働劇団）を組織していた。大地震翌々日の夜半、平沢は数名の警官に呼び出され、大島町の自宅より警察署へと連行された。同じ頃亀戸では南葛労働会の活動家六名が検束され、いずれも生死不明となる。十月十日警視庁は亀戸警察署における彼らの殺害を認め、新聞各紙でも報じられた。①

平沢計七が命を断たれた一連の弾圧は、関東大震災に派生した亀戸事件としていまに伝えられる。まもなく労働総同盟友愛会の依頼により、弁護士山崎今朝弥らの自由法曹団が事件の調査に着手した。犠牲者の家族や周囲の人たちを対象に、かくして作成された聴取書二四件の第一は、平沢の遭難をめぐる知人八島の陳述である。

① 藤田富士男・大和田茂著『評伝平沢計七』恒文社、一六八―一七五頁。

拙稿『紡績工場の労資と女工の被災記録―産業革命先端への震災直撃(続)』三七―四一、九五―九九頁。
online.

平沢計七の検束と殺害（『自由法曹団聴取書』）

聴取書 第一

府下大島町三丁目二百二三番地

八島京一 二九才

一、自分は一日の地震の日に焼出され小松川の方面に逃げましたが、二日に雨が降り野宿が出来ませんので大島の方へ行きたる処、途中で平沢君の細君に逢いました処、自分の家に来て居れと云われたので平沢君の処へ行きました。此時は午後三時頃でした。而して平沢君は翌日正岡君の処へ倒潰家屋片付の手伝に行き、夕方帰って暫くすると夜警に行くと云い出て行き九時か十時頃と思う頃帰って来ました。暫く休んで居ると正服巡査が五六人来て平沢君に、まことに濟まんが警察まで一寸来て呉れと云い、平沢君も「はい」と云いおとなしく出て行きました。

そして夫れ切り帰りませんから細君が心配するし、自分も心配だから五日の正午頃手拭紙等を持ち警察署へ差入に行きました。而して亀戸署の高木高等係に逢い差入れを托したる処、平沢君は三日晩に帰したと云いますから自分はその時平沢君はもう殺されたものと思つて帰って来ました。

二、その訳は、四日の朝三四人の巡査が荷車に石油と薪を積み引き行くに逢い、その中の一人の顔馴染の某正一と云う巡査にその薪及石油は何にするかとききたる処、外国人が亀戸管内に視察に来るので、その死骸三百二十人を焼くので昨夜は徹夜した、朝鮮人ばかりでなく主義者も八人殺されたと云うて居りました。夫れで平沢君も居るのではないかと、巡査にきいた方面の場所へ行き見たる処、朝鮮人支那人等二、三百人

位の人間が殺して山に積でありました。その近辺に平沢君の靴と思われる靴が置いてありましたからです。三、私の考では平沢君は自警団へも進んで出ており、極めて親切な要領の好人ですから、殊に彼の場合演説をしたり、革命歌を唱えたり、又警察内で騒ぐ様な無謀な行動を採る様な人で無いと深く信じて疑いません。

四、尚私の考えでは平沢君は三日に連れて行かれると、その夜の中に殺されたものと考えられます。右の通り相違ありません。

大正十二年十月十六日午後十時

東京市芝区新桜田町十九番地 松谷法律事務所二於テ

八島宗一

聴取人弁護士 松谷与二郎

立会人 〃 山崎今朝弥 ①

平沢計七の活動については、土方与志や鈴木文治による回想もあるが、山内みなの自叙伝には震災直前の面影が親しく描かれる。紡績女工であった山内は、やがて労働運動に専念し、下中弥三郎設立の労働週報社に勤めた。労働者向けの雑誌で平沢計七を編集長とするものの、ここに属したスタッフは他に彼女ひとりであった。

① 『亀戸労働者殺害事件調書一』（『二村一夫著作集』別巻二。online）

山内みな「平沢計七さん」（『山内みな自伝』）

『労働週報』の編集発行名義人が平沢計七さんに変ったのは、大正十一年の十一月七日発行の第二二号からですが、平沢さんは純粹の労働者出身の労働運動家で、大正初期からの友愛会の中心人物のひとりでした。……

『労働週報』の事務所ですら仕事をしているときの平沢計七は、いつも陽気で、黙っているということがありませんでした。私を相手に労働歌を歌ったり、自分の書いた小説を暗唱したり、時によっては芝居を始めたりました。私ははじめは、気違いかと思いました。そうかと思うと「これは売れない雑誌であり、もうからない仕事だ。むだじゃな」と独言を言ったりしました。

小説家の菊池寛が事務所にたずねてきて、「平沢に会いたい」と案内をたのみました。そのようすが、モサツとしていて背が低いので、私は毎朝読んでいた新聞の連載小説を書いている小説家の菊池寛だとは思いませんでした。さぞ美男子だと思っていたから、ピンとこなかったのです。平沢が「ここです。ここです。」と言ってでてきて、芸術論をやりだす。菊池寛が帰ってから私がきくと「おお、あれが有名な菊池寛だよ」と言っていて何かブツブツ言っていました。「何ですか」と私がきくと、「あれはブルジョア階級の小説で労働者階級の小説ではない。面白いだけが小説ではない」ときびしい声で言うのです。私は「わかりました」とこたえました。ながながとプロレタリア芸術論を話したので、そのあとはこっちは聞いていませんでした。次に菊池寛がたずねてきたとき、私が応接間をつかったら、と言ったのですが、「つくろうことはな

い。労働者は労働者だ」といって、狭い事務所の中で芸術論をやりだすのです。私はふきだしてしまいました。①

前衛的なポスター、装幀、油絵で知られる柳瀬正夢は、田端や本郷でボヘミア的な年月を送りつつ、十五歳で院展に入選した。雑誌『我等』を創刊したばかりの長谷川如是閑と大山郁夫に個展を機縁として知り合い、大正デモクラシーを唱導する両知識人から保護と影響を受ける。同時に村山知義らと新興美術の一派マヴォを組み、『読売新聞』に時事漫画を書き続けた。大正十二年八月大山の静養に付き添って房総海岸に滞在し、一足先に帰京した彼は、大山の留守宅で大地震に驚愕。下宿に戻って、深夜検束されるのはその二日後である。綴られた柳瀬の自叙伝は数頁にすぎぬが、なかでは震災における検束と新生への改心が中心的に記述される。②

検束の艱苦と新生への戒心（柳瀬正夢「自叙伝」）

彼が自叙伝を書くという。僭越の至りである。だが恐らく彼はこれを最初にして最後のものとするであろう。来順嗜好機不可逸。この機会にでも彼ひとつ生活過程を整理し、同時に即刻彼のこの過去帳を埋葬せねばならない。ぼやけた彼の記憶よ、やすらかに成仏しろ！

① 『山内みな自伝』新宿書房、一九七五年。一一一―一一三頁。

② 柳瀬信明『柳瀬正夢を語る』『へねじ釘の画家』柳瀬正夢展』ムサシノ出版、一九九〇年。二二二―二七頁。

彼の生年？ 大正十二年。 月日は？ 九月一日。

全く真面目で言っているのである。彼はぐうだらでありし過去の襤褸をば、此の日きれいさっぱりと棄てたから。関東大震災の焼土の中に。

そして彼の更生使命は？ 組織的無産階級解放運動。・・・

大正十二年九月一日の関東の大震災は、私の終始した観念的ニヒリズムを根こそぎ持って行ってくれた。何の馬鹿々々しいと思ひ乍らも、此の災変を限界に更生したことが今頃になって意識されてきた。避暑の房州から皆より二日先に帰京して、大山さんの戸塚の邸の留守番をしていたことが禍因となった。

その夜たしか震災三日目であったと思ふ。十二時過の下宿の二階の夜警から帰って余震に揺れる蠟燭の灯に、漫画日記をつけていた時突然私は襲はれた。後で家宅搜索に取散された部屋一杯の乱雑さと、夜具の上などに残っていた土足の跡などを数えて、私は当夜の物々しさに改めて驚いたが、それは私が街路へ引出されて下宿に背を向け、懐手のまま直立不動を強いられている間に行はれたものとみえる。予審判事達の自動車二台が暗の中に棄ててあるのを見た。私は軍隊の銃剣包囲の中で、中尉に命令された夜空の一方をみつめてゐた。やられるものと覚悟していたが、その瞬間の落ちついた英雄的な気持を今辱かしく思っている。私は馬鹿だった。

親しかった近処の人達は私の敵にと一変した。罵言、弓張、日本刀、鳶口、竹槍、石ころ、銃剣、そして暗、里程、護送中の軍隊、その他の乱暴さ愚昧さをいま詳述する自由と暇を持たないが、自警団の名によって表されたおろかな民衆の姿を見た。警察の狂乱。

私は戒嚴令下の仮設中隊本部から淀橋署に引渡されて、留置場にたたきこまれた。隣檻に五年振の友達が

居たりなどした。格好な其処は私の天国だった。

五日間ののち私は此の安全地帯から放り出され、長谷川さんの忠告に従い一カ月許り門司に帰った。私は彼等の宣伝のあらゆる仮面を見た。じっとしてはいなかった。私は行動を引ずった。①

大山郁夫は当時早稲田大学の政治経済学部で政治学の講義を担当していた。大震災の三カ月前、六月四日に治安当局の検事一団は、佐野・猪俣両講師を搜索するとして、早稲田大学構内に立ち入る。彼らは恩賜館研究室なる大山教授の机上をも点検し、風呂呂包一個と紙包一個の書類等を押収した。これに対して同月二六日神田のキリスト教生年會館で抗議集會が開かれ、三宅雪嶺の講演に続いて大山は、落涙しつつ学問の自由と大學の自治を訴えた。大地震の翌日戸塚の留守宅が搜索され、自邸に戻った彼は九月七日、多数の武装兵士によって憲兵隊臨時駐屯所に連行され監禁される。② 柳瀬正夢の検束と収監はみずから推断するのとおり、大山への弾圧に起因したであろう。

大山郁夫に師事し、のちに彼を党首とする労働農民党に参じる田部井健次は、大震災の第七日恩師の消息を心配し、戸塚の大山邸を訪ねた。房総から帰宅した夫妻は無事で、田部井も朝食を共にする。その間に数十人が邸宅を包圍して、政治学者大山を検束し、これに應對する田部井もみずから望んで憲兵隊屯所に監禁された。かね

① 「自叙伝」〔『柳瀬正夢全集』〕三人社、二〇一三年。第一卷、二〇、二七―二八頁。

② 『早稲田大学百年史』、早稲田大学出版部、一九九七年。第三卷 三四〇―三五二頁。

て陸軍では大山郁夫襲撃の計画がなされていた。田部井による小冊子『大山郁夫』には、震災に乗じた思想弾圧の一端が痛切に語られる。

憲兵隊による大山郁夫の拘禁（田部井健次著『大山郁夫』）

私が戸塚の先生のお宅へ着いたのは、朝の九時ころでしたが、内玄関の戸を開けると、直ぐその突き当りのところにある食堂から先生と奥さんのにぎやかな笑い声が聞えて来ました。ははあ、もう帰って居られるな、と思って私は直ぐに上へあがり、大急ぎで食堂の戸を開けると、先生と奥さんは食事をしておられました。私も直ぐに朝めしを御馳走になることにし、一緒にめしを喰べながら、当時の東京の情況を先生に詳しく報告しました。大杉さんのことは私はまだ何も知って居りませんでした。堺利彦老人を中心とする数名の人々が獄中で殺されたらしい、というようなことや、江東方面でだいぶ多くの同志が殺されたらしいという噂など、私の聞き知って居た限りのことを報告し、最後に私は「先生！我々も東京にいては危いのです。も一度田舎へ逃げ出すことにしませんか」ということを提案しました。

と、丁度そのときです。当時大山先生のところを書生さんをしておったS君があわてふためいて食堂の戸を開け、「大変です！いま兵士たちが剣つき鉄砲を持って玄関のところへ押し寄せて来ています！」というのです。・・・玄関のそとにいたのは約二十人ほどでしたが、なお垣根のところにも二間に一人くらいの割合で兵隊が配置されているのがちらりと見えました。多分家の周囲全体をぐるりと取りかこんでいるのでしよう。全部で五十人くらいの兵隊が動員されてきているらしいのです。・・・

僕は若い将校との談判を終えるや否や、直ちに奥へ取ってかえし、先生にこう言いました。「先生! どうやって来ましたよ、憲兵隊本部の命令で先生をつれに来たのです。家の周囲はもう兵隊に取りかまわれてしまったから、逃げようとしてもとても不可能です。僕も一緒に行きますが、これが最後になるかも知れませんか、その覚悟で行くことにしましょう」と・・・

やがて支度が出来たので、今度は先生と僕と二人で玄関へ出て行きました。そこには例の若い将校が相変わらずいかめしい顔をして控えていました。彼は最初の論争があつてからは、敢えて上へあがろうとせず、じつとそこに待っていたのでした。先生はその若い将校に向かつていかにも静かに、「ごくろう様です」という丁寧な挨拶をなさいました。その将校も黙って目礼し、我々はそのままだよどやと玄関の外へ出ました。先生と僕とを中にして、前方には約二十人くらいの、後方には約三十人くらい兵隊が、四列縦隊に整列しました。そのとき表の方を見ると、垣根のそとに約百三十人位の人たちが、群がり集つて何かやがやと話合っています。多分近所の人たちが噂をききつけて集まつて来たのだと思います・・・

やがて私たちは約一時間ほど歩いて、落合の憲兵隊屯所へ着きました。そこは普通の住宅を臨時に憲兵隊屯所にあてたものでしたが、相当に広い家で、その家の庭には多数の兵隊があちらこちらに屯していました。その家の八畳ほどの広さの板敷きの応接室でした。時間は十一時少し前だったと思います。私はその部屋へ入れられるや否や、とっさにまどのところ行つて外の様子を見ましたが、そのまどの直ぐ下には十数人の兵隊が屯しているので、いざとなつてもそこから逃げ出す可能性は全く無さそうです・・・

我々ふたりは相変わらず応接室に監禁されたままです。そとはもうすっかり暗くなり、やがて八時近くなのですが、まだ何の音沙汰もありません。「どうするつもりなのだろうか、殺すなり、帰すなり、さつさど片づけたらいいではないか!」と僕は腹の中で少々いらいらしながら考えました。が、やがて四、五人の将校がどやどやと部屋の中へ入つて来ました。そしてその中の大将株の男が、「どうもいろいろ御迷惑をかけましたが、もう帰つても宜しいです。御留守中にお宅の家宅搜索をやりましたが、どうぞ悪からず」という挨拶をしました・・・

かくして先生と僕とはその晩の九時近くに無事に家へ帰つて来ました。しかし、僕が憲兵隊屯所でかえりがけに「別段用事も無いのに、我々をこんなところにひっぱつて来て云々、」と言つたのは、実は全く僕の誤解でした。彼らにはやはり「重大な用事」があつたのでした。後で判つたのですが、彼らは最初から暗殺の目的で、先生を憲兵隊屯所へひっぱつたのだそうです。

あの大地震があつて数年後労働農民党の支部が全国各地に確立され、華々しい闘争を展開し始めた頃のことです。四国の或る町の町長で、極めて熱心に労働党を支持していたひとりの老人がありました。その人が或る時労働党の数人の黨員にこんなことを話したそうです。

「諸君は何も知らないだろうが、君たちの党首の大山さんは、大震災の時に危く殺されかたんだよ。陸軍の或る秘密本部の方針で、大山さんを、あのどきどきまぎれに暗殺することになり、憲兵隊が大山さんを自宅から落合の屯所へ引っぱつたのだが、その引っぱり方が余り大げさだった為に、付近の民衆が騒ぎ出し、それをまた新聞社が嗅ぎつけ、四方八方へ電話をかけて大山さんの行方を探したものだから、憲兵隊でもとうとうおおよまさんを殺すわけにはいかなくなってしまったのさ。大山さんという人は運のいい人さ!」と。

この話を聞いて黨員たちは、その老人が何故そんなことを知っているのか、その話に疑問を持ち、直ぐにそれを質問すると、その老人は大声で笑いながら、「実はわしはそのときの憲兵隊の参謀だったのさ」と、

自分の前身を正直に告白したというのです。①

新劇の代表的な男優千田是也は、銀座服部時計店を設計した建築家伊藤為吉の六男である。早稲田大学の独文科に聴講生として在学中の大正十二年、千田は兄熹朔とともに人形芝居に熱中していた。動く人形で『セヴィリアの理髪師』などを演じるため、夏休み末に麻生材木町の小さな家を借り、模型舞台の装置を運び入れた。大部な自叙伝で縷々語られるのは、大地震における市街への脱出と一家の対応である。朝鮮人騒ぎの余波を浴びた千田是也の受難、〈千駄ヶ谷のコリアン〉との誤認はよく知られる。

大地震の襲来と朝鮮人騒ぎの受難（千田是也著『もうひとつの新劇史』）

そこへ越した翌日の午ちかく、熹朔はなにかの買物に出かけ、私と川村君とは鴨居にずらりとぶらさげた人形の糸の具合を調べていた。すると急に家が上下、左右にものごく揺れだし、例の大正十二年九月一日の関東大震災がやってきた。廂から瓦がガラガラ落ちてくるので、うっかり外へも出られず、二人とも縁側の柱につかまって、いつ崩れるかと天井をにらんでいた。

そのうちにだいぶ揺れが納まって来たようなので、ともかく近所の様子を見てこようと、あいかわらず悲劇的な顔をしながらブランブラン揺れている人形たちを袋に入れて押入れにしまい、細い路地をまっしぐら

① 田部井健次著『大山郁夫』進路社、一九四七年。一一―一二、一四―一七、二六―二九頁。

に走り抜けて材木町の大通りに出た。すると六本木のほうから熹朔が息せききってやって来て立ちどまりながら、「おれ、平河町へ行かなけりやならいから、家のほうを頼むよ」というと、またスタコラ引きかえしていった。

よしきたと私は勇みたち、余震のたびに墓石がゴロゴロ倒れている青山墓地を駆けぬけ、白い雲だか煙だが、モクモクしている四谷から赤坂へかけての空をはずに見上げ、これはただごとではないぞとあわてながら、青山練兵場を千駄ヶ谷に抜け、やっと家にたどりついた。

さいわいこの辺は大した被害はなく、わが家も塀が倒れたり、瓦が落ちたりしただけで、みんな無事に裏の空地に避難していた。「熹朔はいつたいなにをしているのよ」と母はだいぶ不服そうだったが、私は熹朔のさっきの済まなそうな顔を思い浮かべて「だってあつちは彼女と女中だけだし、仕方ねえよ」と弁解した。

その晩から私はやたらに忙しくなった。おやじの二号さんや三号さんや近い親類の安否を尋ねてあちこちを駆けまわされたり、その途中で罹災者の大八車を後押しをしたり、主人にはぐれてウロウロしているどこかの婆やさんらしいのを、佐々木たつもこんなことになっているのかなあと、つい日本橋から宮城前までおぶって行ったり、見つかった親類の家へリヤカーで食料をはこばされたり、夜警に引っぱりだされたり一日頃は細工物や本にへばりついている私でも、さてこういう事態のなかで駆けまわるのは、やはりうちでは一番うってつけの年齢だったわけであろう。

センダ・コレヤという私の芸名の由来であるあの事件が起きたのは、この大震災のたしか二日目である。個々の災が夜空を真っ赤にそめ、ときどきガソリンや火薬の爆発する不気味な音がきこえ、余震がくりかえされ、通りには怪我人たちをのせた担架や荷車をかこむ疲れはてた人たちの行列がつづくあの状況の中で

きくと、朝鮮人が日頃のうらみで大挙して日本人を襲撃してくるとか、無政府主義者や共産主義者が井戸に劇薬を投げこんでいるとか、道ばたで避難民に毒餿頭をくばっているとかいう馬鹿馬鹿しいデマまでが、なんとなくほんとうに思えてくるらしい。おまけに鉄衛がそのころ近衛の聯隊長をしていた古荘のところへ見舞いについて姉からきてきた情報によれば、軍は多摩川べりに散開して、神奈川方面より大挙北上中の（不逞鮮人集団）と目下交戦中だという。

そこで私もじっとしていられなくなり二階の押入れにいられた長持の底から先祖伝来の短刀を持ちだして、いつでも外から取れるように便所の掃き出し口の小窓のかげにかくすと、登山杖をもって、お向いの勝ちゃんの従兄の大学生といっしょに、家のまへの警備についた。

そのうちに夜も更け、便々と待っているのも気がきかぬような気かしはじめ、敵情偵察というわけで、千駄ヶ谷の駅にちかい線路の土手にのぼっていくと、うしろのほうで「鮮人だ、鮮人だ！」という叫びがきこえた。ふりかえると、明治神宮の、当時はまだ原っぱだった外苑道路の闇の中をいくつもの提灯がちかづいてくるのが見えた。それをしてつきり（不逞鮮人）をこっちへ追って来るものと思いこみ、はさみ撃ちにしてやろうと走って行くと、いきなり腰のあたりを後からガンとやられた。おどろいて向きなおると、雲つくばかりの大男がステッキをふりかざして、「イタア、イタア！」と叫んでいる。

登山杖をかまえて後じさりしながら、「違う、違います！」といくら弁解しても、相手はいつかな聞きいれず、「センジンダア、センジンダア！」とステッキをふりまわしながら嗅ぎつづける。そのうち提灯たちが集まってきて、ぐるりと私をとり巻いた。みると、喚いている大男は千駄ヶ谷駅のまえに住む白糸ロシア人の羅紗売りだった。そっちは朝鮮人でないことは一目瞭然だが、こっちはそうはいかない。その証拠に棍

棒だの木剣だの竹槍だの薪割りだのをてんでに携えた、これまた朝鮮人だか日本人だか見分けのつけにくい連中が、「畜生、白状しろ」「ふてえ野郎だ、本籍を言え」「嘘をぬかすと、叩っころすぞ」と私をこづきまわすのである。

「いえ日本人です。ついこのさきに住んでいるイトウ・クニヤという、このとおり早稲田の学生です」と、学生証まで見せたがいっこう聞きいれず、薪割りや木剣を私の頭のうえに振りかざして「アイウエオ」を言ってみろの、「教育勅語」を暗誦しろのという。・・・ありがたや、だれかが後ろのほうから、「なあんだ、伊藤さんのお坊ちゃんじゃねえか。大丈夫だ、この人なら知っています」と言ってくれた。近所の酒屋の若い衆である。するともう一人、「そうだ、伊藤君だ」と、青年団の服を着た青年が前に出て来た。これは千駄ヶ谷教会の日曜学校に通っていた頃の友達だった。・・・

いま思えば、ナチスのユダヤ人狩りと同じように、あれは震災で焼け出され傷つき裸にされた大衆の支配層に対する不満や怒りを、民族的な敵対感情にすりかえようとした政府や軍部の謀略だったのであろう。

そんなエピソードをも含めて、あつとという間に東京の三分の二以上を焼け野原にしてしまったこの大地震は、私にいい薬になった。《救世軍の芝居》から『その妹』を経て、これが私の見た第三のリアルなドラマということになるわけだが、これはむしろ《救世軍の芝居》にちかく、だがもっとも大きく、もっとすさまじかった。言ってみれば、人間対人間のドラマもあり、人間対自然のドラマもあり、おまけにその両方が

きびしく巨大で、芸術青年の私はすっかり圧倒された。①

同じく築地小劇場の男優薄田研二は福岡の酒造家で生まれた。子どもの頃彼は郷土芸能（博多にわか）は熱中し、しばしば店先で黒板を背景に自演も披露する。富裕で芝居好きの父親が、評判の尾上松之助を招いて興行を支援し、宿として自宅を提供することもあった。やがて絵画の修行を始めた賢治は、入院を機縁に児島善三郎や倉田百三と知り合い、ついに大正九年倉田を慕って上京し牛込に下宿する。おりしも白樺派の文人たちが倉田の戯曲『俊寛』の上演を企画し、大森池上の料亭に設けられた舞台で彼は俊寛の役を演じた。②

演劇への志望と自宅の震災（薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』）

どうやら生活も落ち着いたころ、みやこ新聞の学芸記者をしていた上泉秀信さんから手紙がきて、村田実が地球座という劇団をつくって浅草で旗揚げ公演の準備をしている、行ってみたらどうかと、すすめてまいりました。白樺の人たち、武者小路先生、有島武郎先生、長与善郎先生なども、私のことについてはいろいろと心配して下さっており、またそういう関係で上泉さんも骨折ってくれているわけです。しかし私の内心は実はまだ絵のほうへ未練があつて、なかなか決心がつかずにいたのですが、妻の晴子も画家としてより俳優

① 千田是也著『もうひとつの新劇史ー千田是也自伝』筑摩書房、一九七五年。五六―五八頁。

② 薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』東峰書院、一九六〇年。二九―三七頁。

優としてのほうが大成すると思う、と強くすすめることもあつて、やっと芝居に入る決心がつき、じゃあ行つてみようかと、と腰をあげた瞬間、ぐらぐらとききました。大正十二（一九二三）年九月一日、死者九万一千名余、五二万戸の被害家屋を出した関東大震災の第一震です。

東京では地震直後一四五カ所から火災がおこり、水道管破壊のためほとんど消火が行なわれず、火は風をよび、風はまた火をよんで、下町一帯をなめつくしました。・・・この混乱のなかで、一時的におこった無政府状態を利用して、為政者みずから放った流言ー不逞朝鮮人の暴動、社会主義者の蜂起ーによって、ただでさえ冷静を失った民心に不安と動揺を与え、自警団を組織させ、朝鮮人と思えば撲殺し、軍隊、警察も内乱鎮圧の演習として直接手を下し、朝鮮人、社会主義者を犠牲にしたことは、永久に忘れることのできない恨事でした。・・・

さて私の家のはじめの一震でベチャンコになり、私は梁の下敷になってしまいました。しかし、何が幸いするかわかりません。若いころ病氣勝ちだった体をきたえるために、から手を稽古したことがありましたが、針金を胸に撒いてブツリと切るぐらいのことは当時でもできましたが、そのから手の呼吸でどうにか危地を脱することはできました。しかし、東京は壊滅です。芝居や絵どころではなくなりました。家がつぶれたので行くところがない。倉田先生のお家は幸いつぶれずにすみましたから、あとのことを頼んでひとまず東京を引きあげることになりました。・・・

東京を離れるに際して私は倉田先生から、大阪におられる小山内薫先生に会って身の振り方を相談するようにという紹介状を頂きました。当時小山内先生は大阪のプラトン社という出版社の編集顧問をしておられ、月に一度ずつ下阪することにしていて、家族連れで関西に来ていて震災を知り、大阪定住を決意しておられ

た。私は伊丹に腰を落ち着けるとさっそく大阪へ先生を訪ねましたが、先生の頼みとする有楽座、明治座、市村座など都心部の劇場はみな焼け亡び、東京の再起はむずかしいのではないかと悲観的で腰をあげる様子はありませんでした。

私は仕方なく伊丹で再び絵をかきはじめました。地三の手を引き、つま子を乳母車にのせ、自分はカンパスと絵具、それに酒をつめた魔法ビンとをかついで、尻端折りをして毎日絵を描きに出かけましたが、煙草は両切では面倒なので、葉巻にしましたから、伊丹のような田舎ではたちまち名物おとこになってしまいました。①

築地小劇場の明星となる田村秋子の父は、戯曲家田村西男にほかならず、花柳界を題材とする彼の作品も帝国劇場や新橋演舞場で上演された。大地震の数ヵ月前女学校を卒業した秋子は、親睦会の素人芝居で初めて舞台に立つ。出しものはプーシユキン原作の『大尉の娘』であり、父の縁故で新派の名優、花柳章太郎と井上正夫から事前に指導を受けた。彼女の経歴については聞き書き『ひとりの女優の歩んだ道』で伝えられる。

素人芝居の経験（田村秋子・小山裕士共著『ひとりの女優の歩んだ道』）

あたしは小劇場に入る前の年に、父に勧められて初めて父たちのやっていた通話会の舞台に出て、生まれ

① 薄田研二著『暗転―わが演劇自伝』四二―四五頁。

て初めて芝居というものをしたんです。神田女学校を卒業した年でしたわ。通話会というのは文士劇ともいっていましたが、あたしがでた頃は他の職業の方たちも多く、同好の士の集まりとでも申しましょうか、坂本猿冠者、鳥居清忠、三宅孤軒といった方々がスターでした。出た動機は自分が舞台をやりたいっていうじやなくて、「人の前で芝居みたいなのをするのはいづいぶん面白いよ。いちど経験してごらん」という父の無責任な進め方によって、引っぱり出されたんですよ。・・・

『大尉の娘』の初公演というのは花柳（章太郎）さんと井上（正夫）さんが初めて二人でおやりになって、前の月にたいへんな評判だったんです。通話会で『大尉の娘』をやるうということになったのも、先月のその舞台装置がそのまま同じ明治座に残っているのです、それを使えばいいっていうんで、選んだ出しものだったんです。で、あたしがとにかく一応やったら、井上さんはじつと黙って見ていらっしやったんですが、何もおっしゃらないで、仏頂づらをして、いきなり羽織をお脱ぎになったんです。そして「これから私がお父さんの役をやってあげるからやっごらんさい」とおっしゃって、素人の女の子を相手に、そりゃもう本気でやって下さるんです。井上さんって偉い役者だと思いましたがわ。・・・とにかく夢中で汗だくで、その芝居であたし、芝居っていうものが忘れられなくなりましたし、芝居っていうものの魅力にとっつかれたかも知れないんです。それ以前は芝居をしたっていうような気持ちは毛頭なかったんですけど、その芝居がすんでラクになって、この芝居の役にさようならかと思うと、たまらなくなりましたね。・・・

通話会の素人芝居に出たのは、それ一回きりなんです。それから震災にあったのですから。あたしのそんな気持ちが父親にもわかったのでしょうか。「君ね、芝居したいだろう」と言ったんですよ。地震の最中に、ほうぼう避難して歩いている最中に。で、あたしは言ったんです。「芝居したいわ。でも、あたしのような者

は役者になれない。」それよりも地震で焼けだされたあたしは、どこかに職をさがしてお金をとることを考えてたんですよ。ところが父はこういうんです。「どうせ何か仕事をするんなら雑誌の仕事をしろ。小山内さんがプラトン社にいるから、もしかすると、その女書生に使ってくれるかもしれないよ」って。そして大阪に行つてらっしゃる小山内先生に父が手紙でお願いしたら、先生、「僕たちの小劇場が近い将来に出来る。そのとき研究生として入れるからそれまで東京にいて待て」とおっしゃって下すつたんです。「ああ、あたしはまたまた芝居が出来る」―あたしはすっかりうれしくなっちゃいましたね。①

房総半島北条へしばらく転居した及川家では、避暑地での快適な自然と交遊によつて娘道子の健康もかなり回復した。小学五年生の夏休みも明けて、帰京と登校の準備を始める九月一日、館山湾沿岸も激震と津波に襲われる。道子など子ども三人は倒壊する家屋の下敷きとなり、辛うじて知人に救出された。自伝『いばらの道』には、苛烈な地震と避難の様相が、繊細な感性をとおし痛切に語られる。

房総で倒壊する家屋の下に（及川道子著『いばらの道』）

いよいよ今日から九月という日は、朝早く通り魔のようなひどい嵐があつて、それが過ぎた後は、また気味の悪い程のいいお天気になりました。お昼近く母は裏の井戸端でたらい一杯のお洗濯に忙しそうでした。

① 田村秋子・小山裕士共著『一人の女優の歩んだ道』白水社、一九六二年。二二―一三、一五一―一七頁。

父は一等小さい弟の菊夫を抱いて、お守りをしながら庭を散歩してられました。和夫と冬生は奥の間で佐々木さんを相手に何かおもちやをいじつて遊んで居りました。そして、私と強子と従姉の浜ちゃんとの三人はお茶の間でおままごとに夢中でした。

そのお茶の間の窓近くには大きな橙の木がありまして、その実を取つて遊んでいたのですが、丁度強子がそれを採ろうとして、手を伸ばした瞬間、不意に沖の方で雷の鳴るような音がしたかと思うと、いきなりミリミリ、バーンバーン、ガクガク!という物凄い響と共に、柱は折れ曲り、襖障子は弾け飛び、壁は崩れ落ち、家は今にも揉みつぶれるようで、畳はまるで波のように揺れうねり、棚の上のものは何一つ残らず転げ落ち、一瞬にしてあたりは言語に絶した修羅場と化していました。

私はとっさの場合に、日常父から地震の時はあわてて外へ出てはいけない、と教えられたことを思い出し、三人一塊となつて、畳にうつ伏してしがみついています。いえ、その場合出ようにも、どうしようにも、立つことはおろか、腹ばうことすら出来ないのです。・・・

そのうち震動が少し小止みになった隙を見て、佐々木さんに抱かれるようにして、弟達は戸外へ飛び出して行きました。これを見て私達もこの時だと思つて、三人一緒に二、三歩歩みかけた時、ああ何という恐ろしいことだったでしょう。前よりも一層物凄い地鳴りと共に、もっと激しい震動が襲つて来たと思う間もなく、倒れかかっていた柱、崩れ残っていた壁、そして落ちかかっていた天井が、この時とばかりに鋭い悲鳴をあげて、一時に私たちの上に覆いかぶさつて来ました。手をひいていた妹を護ろうと、自分のからだを伏せた瞬間、どしりと重い板のようなものに抑え付けられたと思うと、そのままあたりは真暗闇になって、何も見えなくなっていました。・・・

屋根、天井、柱と三重にも四重にも抑えつけられた私達を掘り出すには、とても父と佐々木さん二人の手に合わず、と云って隣近所どこでも皆同じように困っている時とて、手伝って貰うことも出来ず、氣ばかりあせて弱り抜いておられるとき、折良くいらつした高等師範の方々に手伝って貰って、先ず従妹、それから私と掘り出されましたが、最後の強子は大きな重い柱に片方の足を圧しつけられているので、これを引き出すのに随分手間取りました。その間強子が腹を千切られるような悲しい声をしぼって「もうこれからいい子になりますから、助けてください！」と泣き叫んだあの有様がまだ目にみえるようです。

こうして幸いにも一同命に別條なく、顔を合わすことが出来て、庭の大きな橙の木の下に、寄り添ってホット一息ついていると、またしても大きな震動がやって来ました。薄気味悪い地鳴り、亀の甲形に裂けて行く地割れ、そこから噴き出す水、そしてあちこちに起る人畜の悲鳴―これこそ全くこの世の終りかと思われしました。

この時父はつと立ち上り、泣き叫ぶ一同をおししずめながら、諄々とした非常時に処する態度を訓えたのち、両眼に涙を浮かべながら悲壮な声を張り上げて、「主よ　みもとに近づかん　のぼるみちは　十字架にありとも　など悲しむべきや　主よ　みもとに近づかん」と讚美歌を歌い出しました。そして、歌い終ると一同深いお祈りをいたしました。

このとっさの場合の、こうした父の落着き払った態度に、威圧と限りなき信頼を感じてか、付近の人々までが、私たちのまわりに寄り集まって来て、みな一様に鳴りをしづめて父の言葉に耳を傾けていました。

するところからともなく、津波が襲って来るかもしれない、という警報が伝って来ましたので、みんな山の方へ逃げなければならなくなりました。強子だけは足を柱で押しつぶされて、ひどい怪我をしてとても歩けませんので、米屋のリヤカアを借りて運びました。

山の上に来て見ますと、そこはすでに避難している人々で一杯でした。泣くもの、喚くもの、唸るもの、また傷けるもの、死せるもの―折柄後ろの森に沈もうといっている赤い夕陽にたられて、それらの人々の姿は戦乱の巷もこうあろうかと惚ばれるほどでした。

ところが夜に入ってから、ここもまだ不安だと云うことになり、子供たちだけでもつと上に登って、そこにやっと落ちつきました。そして毛布を敷いて貰って休みましたが、いつ襲うかも知れない地震と津波に対する恐怖に加えて、折柄燃え続けていた隣村の山火事が、だんだんこちらにも移って来そうに見え、燃えさかる火を見ては、恐怖が募るばかりで、周囲はいつまでも騒々しさが止まず、殆ど眠ることも出来なませんでした。

それでも明け方少しは眠ったものと見え、朝眼を覚まして、何気なく上を仰ぎますと、そこにはいつもの天井の代りに低く覆いかぶさった松の枝の隙間から高い空が覗いていました。そして、丁度東の空には真紅な太陽がやっと上りきったところでありました。

隣りに寝ている強子ももう目を覚まして、繃帯を巻きつけた足を毛布の裾からのぞかせて、痛そうに顔をしかめながらも、心配そうに私の方を見守っています。私はふと寝返りを打とうとして、体を動かしますと、胸のあたりがズキンズキン痛むので、恐るおそる手を触れて見ますと、いつの間にか繃帯が幾重にも胸に巻きつけられていました。―あとで知ったのですが、屋根の下敷きになったとき、肋骨を挫かれていたのを、寝ている間に手当されていたのです。

段々明るくなるにつれて、周囲に目をやると、右にも左にも、前にも後ろにも、頭や手や足を繃帯した怪

我人や、むしろや布切れに包まれた死人が無数に転がっています。私はその惨状にゾツとしてしまいました。その日のうちに、海岸にあったパラーの天幕を持って来て、諏訪森の丘に小屋を建てて、その中に私たちは收容されて、こうして私たちの山の生活がはじまったのです。①

料理の達人としても著名な女優沢村貞子は、歌舞伎作者の娘として生まれた。同家の息子たちは子役としてはやくから舞台に立ち、兄は四代目沢村国太郎、弟は映画俳優加東大介として大成する。男女平等を旨とする第一高等女学校で学んだ長女貞子は、女優として立てる新劇の道を志し、まずは築地小劇場の山本安英に相談の手紙を送った。彼女が大地震に襲われたのはその数年前、女学校三年のときである。大火によって浅草猿若町の自宅は焼尽し、父と母がひととき行方不明となった。衝撃を受けたのはまさに台所で昼食を用意するさなか。気丈な母親は娘らへさきに避難するよう命じ、みずから脱出したあとは浅草寺の炎上防止を人々に督励した。

歌舞伎一家の震災体験（沢村貞子著『貝のうた』）

大正十二年九月一日の関東大震災は、私が女学校の三年の二学期、始業式の日起こった。学校から帰った私は、昼ご飯の仕度をしていた。父母も弟も芝居へ出かける直前だった。兄はひいきの客に連れられて、箱根へ行って留守だった。毎月朔日、十五日には小豆ご飯を炊くのが、芝居ものの習慣である。でき上

① 及川道子著『いばらの道』紀元書房、一九三五年。四四―五二頁。

がったご飯をお櫃に移し、お豆腐のおつゆの味をみようと小皿に口をもって行ったとき、突然ゴーツというなり声とともに家がぐらぐらとゆれ、あわててガスの火を消した私は、足がもつれて尻餅をついた。まわりじゅうの壁がバラバラと落ちて、鍋の中が白くにごった。

二階で掃除をしていた母が、階段から転げ落ちながら叫んだ。「早く火を！ガスを消して！」また激しくゆれて、やっとガスの元栓をしめた私の足元に、鍋が引っくりかえった。新聞をよんでいた父は、敷いていた座ぶとんを頭にのせて「ナミアミダブツ、ナミアミダブツ」と口の中でブツブツ唱えるばかりだった。そのまま動かないのは腰が抜けたらしい。

案外柱がしっかりしていたのか、わが家はひどくゆがんだだけで、つぶれなかった。丁度昼飯時だったせいもあって、あつという間に八方から火の手が上がった。みようにシンとした異様な空気のなかに、激しい叫び声、泣き声が鋭く耳を破った。余震は絶え間なくつづいた。

「私と父さんはもう少し様子を見るから、あんたたちはとにかくさきへ逃げなさい。」母は急いで小豆ご飯のはいったお櫃と三本の鯉節を私にわたしながら言った。弟にはお湯のはいったままの鉄瓶をもたせた。吾妻橋を渡って向島で落ち合う約束しているところへ、父の妹ひさ伯母とその養女で私たちの姉せい子が、着のみ着のまま転げながらたどりついた。ほんの一町と離れていないのに、ここまで来るのが命がけだったと、叔母はあおい顔でオロオロ泣くばかりだった。母の姉とみ叔母もかけこんできた。

「とにかくこの子といっしょに先にお逃げなさい」母は私の腰にずっしりと重い袋を結びつけた。五銭白銅ばかりはいった、うこんの財布である。そのころの芝居の当たり祝、大入り袋の中身は五銭の白銅玉だった。これが好景気時代の、母のただ一つのへそくりだった。

結局私たちは母と約束した向島へ行けなかった。吾妻橋の上で向島から逃げて来る人波に押し返されてしまった。川の向こうもあちこちに火の手が上がっていた。やっと上野の山へたどりついて、その夜をすごした。西郷さんの銅像の傍へやっと座れるだけの席をとった。あたりはいっぱいの人だった。その人たちが夜ふけとともにものを言わなくなった。不気味な静けさのなかで、動物園のライオンや虎のうなり声だけが、ときどき大きくこまりました。上野の森から見おろす下町には、何十本もの真っ赤な太い火柱が、空を焦がすように傲然と立っていた。仮借なく人間たちを焼き殺す地獄の火が、どうしてあんなに美しく見えたのだろうか。……

母はきつと生きている。そして父を守っているにちがいない。私はそう信じていた。夜の明けのを待って、私はその付近の貸家をさがした。庇が落ちて、ひどく汚いけれど、安い家が見つかった。屋根さえあればそれでいい。大家さんの米屋の主人に一生懸命たのみこんだ。やっと承知してくれた米屋さんは、畳の上には五銭白銅を前家賃として並べる十四歳の少女の顔を、あきれたように見つめていた。お米に味噌、鍋とふとんの借り賃を払っても、白銅はまだ何枚が残った。

二人の叔母と弟をそこに残して、私と姉は父母をさがしに浅草へ向かった。道々まだ何べんも自警団に認められて本籍姓名をいわされた。恐ろしい噂はますます拡がっていた。焼けたあとはまだブスブスとくすぶっていた。こわれた蛇口からチョロチョロと流れでる水で、草鞋をしめさなければ歩けなかった。地熱で足の裏がやけどしそうだった。

そこだけがたった一カ所焼けのこった浅草観音堂へたどりついたのは、夕方近かった。境内には運よく命びろいをした人たちがいっぱいだった。「加藤伝太郎さん。加藤マツさん」姉と私は声をからしてよび歩いた。本堂の前の大銀杏の根もとに張ったボロ切れのテントから、「ここだよ！ここにいるよ！」母が這いだしてきた。つづいて父も「おい、無事だったか」と涙を浮かべてすがりついた。自慢の高い鼻が、すりむけて赤くなっていた。

「あら、貞ちゃん」近所の半玉のうさぎちゃんも、どろんこのアツパツパで顔をだした。長唄のお友達である。まっ黒に煤けた顔にサンバラ神ーどうみても浅草きっての売れっ子の雛妓とおもえなかった。うさぎちゃんは「お貞ちゃんとおばさんのおかげで助かったのよ。たのしかったわ。おばさんは、ほんとうに、」と溜息をついた。

その話によると、母は命からがらここへ逃げこんだ人たちを叱咤激励して、本堂に火のうつるのをふせいだという。そしてどうやら火が消えて、やっと落ちつくると、味噌屋の焼けあとからは焼け味噌を、肉屋の店からは焼き肉を掘り出して、まわりの人たちに公平にわけ、飢えをしのがせたそうである。……

私たちが家を逃げ出すと間もなく、三方から火の手がせまり、さすが気丈な母もつづら一個を背負って逃げるのがやっとなった。……すぐ目と鼻の瓢箪池にはまだ死体が浮かび、本所の被服廠あとでは、逃げこんだ人たちの持ち込んだ荷物に火がつき、三万人あまりが焼け死んだとまわりの人が声をひそめて話していた。……

年も押しつまって、浅草の焼けあとにバラックができた。大工の叔父が「はやくお貞ちゃんを引きとってやらなければ、」と、一生けんめいに奔走くれたおかげである。一時しのぎのお粗末なものだが、私には御殿のように見えた。東京っ子の復興の努力はめざましかった。近所の人たちも、その年のうちにあらかた帰

沢村貞子が育った芝居街浅草猿若町は、水野忠邦による天保の改革に起源を有する。町人の暮らしを取り締まり、奢侈・遊興を禁じる水野は、城下より離れた浅草にのみ、芝居小屋の建設を許した。そのため浅草寺北方が猿若町と改称され、市村座、中村座、河原崎座の三座が鼎立して、芝居茶屋が並び芝居関係者もここに移住する。以後「猿若町にのみ演劇の隆盛を誇るに至」り、「劇道の発達とともに江戸の好事をここに蒐め、為に櫓簀え旗幟翻るに至」った。市村座では幕末に河竹黙阿弥の『三人吉三』が初演され、大正に入るや五代目尾上菊五郎と初代中村吉右衛門による黄金の菊吉時代を呼び寄せた。②

明治十九年浅草公園において瓢箪池の開削がなされ、四年後には千束町に十二階建ての凌雲閣が完成した。これを中心として周囲の浅草六区には興行街が発達し、浅草寺詣でや吉原通いの途上にも寄る盛り場ともなる。島村抱月による芸術座の消滅、さらには小山内薫による自由劇場の活動停止によって帝国劇場が不振に陥ったため、伊庭孝や石井漠など丸の内新劇の落武者は、六区の日本館、金竜館、観音劇場に活路を求めた。大衆的な浅草では音楽と舞踊が主体であって、新劇はオペラに挟まれてわずかに上演される。③ こうして大正六年頃から浅草

① 沢村貞子著『貝のうた』新潮社、一九八三年。四五―四七、四九―五一、五五頁。

② 新実武編『浅草猿若町』新実商店、一九七三年。四七―五〇、八九―九〇、一〇三頁。

③ 松本克平著『日本新劇史―新劇貧乏物語』筑摩書房、一九六六年。三二五―三二七頁。

オペラは最盛期を迎え、日本館における東京歌劇団の『天国と地獄』や金竜館における根岸大歌劇団の『釈迦』が人気を集めた。しかし、関東大震災は猿若町の芝居小屋をすべて焼き尽くすとともに、六区の興行街をも焦土と一変させた。

大震災と浅草興行街（内山惣十郎著『浅草オペラの生活』）

九月一日午前十一時五八分。突如として襲った関東大震災に、歓楽街浅草公園は一瞬にして猛火に襲われ、生地獄となった。金竜館の舞台ではその時佐々紅華作のお伽歌劇『カチカチ山』を、杉寛のタヌキ、高井ルビのウサギで熱演の真最中、天地が崩れるばかりの大動揺に、木造作りの楽屋は大波のように揺れ、道をへだてた公園劇場とハチ合せをせんばかりの凄まじさに、女優連中は悲鳴をあげて、狭い階段を転がるように表へ飛び出した。

六区は各館から溢れ出た観客が、猛火と煙の中を逃げまどい、杉寛はタヌキの縫いぐるみを着たままで、群衆を押し分け掻き分け、無我夢中で瓢箪池の中の島までやっとたどりついた時、一大音響を立てて十二階が真ん中から折れて崩れ落ちた。歌劇の殿堂金竜館も日本館も、いや浅草公園は観音堂が奇蹟的に残っただけで、あたり一面荒涼たる焦土と化してしまった。

本城を失った歌劇人は、再建の日までと、東京を後に地方巡業に出たものの、楽譜は焼け衣装は焼け、満足な興行は出来なかった。それでもふたたび六区復興の日、オペラ再興の日を夢見て、北に南に旅巡りを続けて露命をつないだが、さて復興の浅草は、地方から入りこんだ大工、左官の職人たちの天下で、オペラフ

ァンの学生、サラリーマンは姿を消し、観客層はガラリと変っていた。

翌十三年四月浅草劇場にオペラ残党の役者をかき集めて森歌劇団を結成。だが、スリルとスピードとエロチシズムをもつ剣劇と安木節が六区興行街を風靡し、さしも全盛を誇った浅草オペラは、ついに再びその華やかな幕を開くことなく、関東大震災と共にフィナーレとなってしまったのである。①

大震災災により首都の興行界が壊滅するなかで、帝国劇場は巨費を投じて再建工事を急ぎつつ、早急の営業を企画した。早くも十一月九日から三日間、帝国ホテルの演芸場を借り、ヤッシャ・ハイフェッツのヴァイオリン演奏会を催したのである。同じ仮舞台で同月松旭斉天勝の一座の奇術、翌月には舞台協会により山本有三の戯曲『生命の冠』などが演じられる。大正十三年二月には麻生南座で守田勘弥一座が武者小路実篤作『桃源にて』を、また報知講堂では佐々木節一座が坪内逍遙訳の『ヴェニスの人』を披露。震災により帝国劇場専属の俳優は多く解雇されたものの、残された少数の女優が南座などの舞台にも登場した。同年十月ようやく帝国劇場の再建が完了し、改装記念として平山晋吉作・幸田露伴加筆の『神風』を尾上梅幸、松本幸四郎、守田勘弥が演じ、招かれた中国の名優梅蘭芳とその一座もここで公演する。②

① 内山惣十郎著『浅草オペラの生活』雄山閣出版、一九六七年。一一九―一二〇頁。

② 『帝劇の五十年』東宝株式会社、一九六六年。一一八―一一九、一八二―一八五頁。